

Contents

- 巻頭言 身体知の学びを被災地の心の復興に
特集I 「日吉キャンパス公開講座」 「HAPP」
特集II 「神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座」 「情報の教養学」
特集III 【教養研究センター設置科目】
生命の教養学 / 身体知・音楽 / 身体知・映像 / 身体知 / アカデミック・スキルズ
特集IV 「日吉学」 「学習相談」
特集V 【研究サポート】 「研究の現場から」 「教養研究センター選書」
活動予定 4月～9月、「読書会推進企画『晴読雨読』」
私の〇〇自慢



身体知の学びを被災地の心の復興に

商学部教授・慶應義塾大学コレギウム・ムジク指揮者

佐藤望 (商学部)

Nozomi Sato

3・11 震災直後、被災地のあちこちで「ふるさと」が歌われる光景がありました。震災後頻りに被災地に入っていたある音楽家は、これまで元気にはしゃいでいた子供たちが「いかにいます父母」のところで泣き出したのを見て、二度とこの歌が歌えなくなったと言います。

2月7～9日、教養研究センター設置科目「身体知・音楽」履修者で構成される慶應義塾大学コレギウム・ムジクアカデミー声楽アンサンブルが、岩手県花巻市と大槌町にかけ、被災地支援コンサートを行いました。そこで、三善晃の《地球へのバラード》や宮沢賢治の歌とともに、「ふるさと」や「赤とんぼ」を披露しました。

私たちが、日吉でのリハーサル中「ふるさと」のなかの



「いつの日にか帰らん」の箇所を歌ったとき、震災や津波で帰るふるさとをなくした人たちを前に、どうしてこの曲が歌えるだろうかと、胸が詰まる思いがしました。

しかし、大槌町でのコンサートのオーガナイズをしてくださったNPO遠野まごころネットの白澤良一理事長は、こうおっしゃいました。「〈ふるさと〉は何回でも歌ってください。『いつの日にか帰らん』というのは希望であり、この希望が無くなると人は生きていけなくなるんですよ」と。

コンサートに集まったのはまだ仮設住宅に住む皆さんが中心で、この方たちは、震災や津波で荒果てた故郷を目の前に、まだ電気も復旧していない寒いなかこの歌を、「夢はいまめぐりて、思いいずるふるさと」と、何度も歌ったのだそうです。

今回のコンサートの最後では、その方々が大きな声で涙しつつ、この「ふるさと」を一緒に歌ってくださいました。そして学生たちの目にも涙が浮かんでいました。

震災の話は嫌というほど耳にし、それを一般化して鈍感になっているのではないのでしょうか。そして、5年前に起きた出来事はあたかもなかったかのように、都会では時間が流れています。

沿岸部被災地では、いまだかさ上げ工事のタンクカーが行き来し、まだ町の姿は見えませんが、これから多くの建物が建てられ、整備された町が築かれていでしょう。しかし、人々の「心の復興」は、これからです。この旅を通じて、学生たちはただ知識として言葉で知るだけでは知ることができない、大切なものを五感で知り感じ取ったと思います。そして、被災地の木々、山々、人々の心にしみわたる応援歌を、これからも歌い続けることの大切さも。

《大槌町旧役場前で手を合わせる慶應義塾生たち》この庁舎で当時の町長を含む40名が津波にのまれ亡くなった。その後ろにはかさ上げ工事の広大な土地が広がるが、町の姿はまだない。

日吉キャンパス公開講座

毎年秋に開講し、近年は受講希望者が定員を上回る盛況ぶりとなっている日吉キャンパス公開講座ですが、今年度は「色と紋様の世界」というテーマのもとに、10月3日から12月5日までの土曜日に8日16名の講演が行われました。「色」をめぐる生物学・物理学など自然科学のアプローチを基軸に、美術品や生活文化、さらには音楽まで話題となり、文系理系の垣根を超える豊かなシリーズになりました。とりわけ、化粧品、染色、デザイン、花と、実際に「色」の制作活動にかかわっている外部講師においでいただいたことが特徴でしょう。毎回のお話はまさに色彩豊かなもので、大学の通常のカリキュラムでも実現できないようなラインアップとなっています。各講義の最後に設けられた質問の時間には、受講者から興味深い質問やご意見もたくさん出ました。コーディネーターとしてご尽力いただいた法学部の秋山豊子先生に感謝申し上げたいと思います。(納富信留)

2015年度テーマ 色と紋様の世界

2015年度の講座は「色と紋様の世界」というテーマで、10月3日から12月5日まで8週、合計16名の講師が担当しました。「色」の定義、心理的効果、金属光沢の「構造色」、動物の多彩な体色、遺伝子工学を使った「青いバラ」、化粧品と化粧品の開発、浮世絵や古典文学の中の色、美術・衣装・じゅうたんの色と紋様から歴史と絡めて構図と彩色の解説、更に音楽の中で感じる色など、自然科学から人文科学、美術や音楽の世界までさまざまな専門領域から「色と紋様」が捉えられ、豊かな色彩世界が広がりました。また、視覚障害者にとってのユニバーサルデザインなど、私たちが配慮すべき事柄も提示されました。定員を超える申し込みがあり、高校生から88歳の方まで多様な多くの方が熱心に受講され、和やかな笑いが漏れる雰囲気の中、質疑応答も活発で多岐に渡りました。受講生は身近な「色と紋様」について改めて理解を深め、その意義と魅力を再認識されたと思います。生物学での「色と紋様」を専門としてきた私も、多分野に渡る深い広がりでのこのテーマを拝聴できた贅沢さを実感しました。貴重な講義の数々を何らかの形で残せればと少し残念に思っています。これからも、この公開講座によって、地域の方々とこのような知の世界の広がりを共有していけることを願っています。(秋山豊子)



満席となった公開講座の会場



HAPP学生企画のチラシ(左)と会場の様子(右)

HAPP

2015年度秋学期 HAPP の活動

毎年秋学期において、慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会(以下 HAPP)は、春学期中に公募、採択を決定した企画の実行を核として活動を行ってきています。2015年度に採択された公募企画は、教員企画が1件、学生企画が3件、職員企画が1件でした。これらの中には、最後の吉原芸者のドキュメンタリー上映会、これについての講演、および関連文化についての展示、あるいは、落語を使ったパフォーマンスをメディアセンター(図書館)内で行うなど、意欲的な企画がありました。いずれの企画にも異なった趣向が見られ、地域住民を含むたくさんの方の来場者を見ました。HAPPの公募企画は、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献していることが確認できました。

秋の企画についての詳細は、HAPPのホームページ(<http://happ.hc.keio.ac.jp/>)で見ることができます。(石井明)

【HAPP】2016年度スケジュール

新入生歓迎行事

「大野慶人舞踏公演—土方巽舞踏大解剖」

4月22日(金) 18:15~20:00 来往舎イベントテラス

新入生歓迎講演会「物語の世界Ⅳ」

5月12日(木) 18:15~20:00

来往舎シンポジウムスペース

新入生歓迎行事「大学体育施設紹介と体力および体組成測定」

5月12日(木)、19日(木)、26日(木)、6月9日(木)
16:30~18:00

協生館トレーニングルーム

新入生歓迎行事「ライブラリーコンサート in 日吉
—図書館がコンサートホールになる3日間—」

5月20日(金)、23日(月)、24日(火)の午後
日吉メディアセンター1階ラウンジ、地下1階AVホール

「塾長と日吉の森を歩こう」

5月21日(土) 14:30~ まむし谷(散策)

新入生歓迎行事「日吉音楽祭2016」

7月3日(日)および9月24日(土) 14:00~
協生館 藤原洋記念ホール

神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座

「文化としての病と老い」の立ち上げと実施

教養研究センターは、神奈川県の実施するヘルスケア・ニューフロンティア構想への申請と採択を受けて、「文化としての病と老い」という研究テーマに取り組むことになりました。当センターは、これまで、「身体知」、「生命の教養学」など、「生きることの意味」、「生きることの価値」を強く意識した研究・教育を行ってきました。これは、心や身体から乖離した知識偏重は、真の教養ではなく、むしろ教養の対極にあるものという直感によります。この確信のもとに、運営委員会での議論を経て、本プロジェクトでは、公開講義の設置、ワークショップの実施、研究活動、研究会の設置という多様な方法を並行的に進めました。公開講座は、なるべく学生が参加しやすくし、かつ、日吉キャンパス公開講座との差別化を図るため、平日の5時限に設置しました。2回のワークショップでは、ピシヨップ山田氏によるダンスワークショップと佐藤元状先生の解説による映画『アイリス』の上映会、3月2日には、廣川和花先生、荒木文果先生、中村哲子先生、神山彰先生に講義を依頼し、研究者対象に研究会を行いました。この他に、障がい者へのワークショップに取り組む中嶋夏氏にロングインタビューを行いました。これについては、いずれ学内紀要において公開するつもりです。講座と研究会については、ポスターもご参照ください。(小菅隼人)

2016年度 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座
文化としての病と老い

10/6 (水) 16:30-18:00
 生きることと病むこと—その歴史的な変遷—
 佐藤元状 (東京大学大学院 総合文化研究科)

10/27 (水) 16:30-18:00
 病とユートピア—認知症の患者とケア—
 文彦 (東京大学大学院 総合文化研究科)

10/31 (日) 9:00-18:00
 「数と時間」ワークショップによるダンスワークショップ
 ピシヨップ山田 明子

11/17 (水) 16:30-18:00
 認知症と「理知」の崩壊
 廣川和花 (慶応義塾大学 総合文化研究センター)

12/15 (水) 16:30-18:00
 身体性を知る「病」—その心身応答—
 文彦、中村哲子 (東京大学大学院)

1/16 (日) 9:00-18:00
 映画『アイリス』上映会+レクチャーワークショップ
 佐藤元状 (東京大学大学院)

慶応義塾大学教養研究センター
 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 事務局
 〒210-8586 慶応義塾大学 日吉キャンパス 総合文化研究センター 301号室
 TEL: 045-558-3111 (受付時間: 午前9時～午後5時) FAX: 045-558-3112
 E-mail: hsc@keio.ac.jp

神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 研究会
「文化としての病と老い」

2016年3月2日(水) 10:00-17:30
 慶応義塾大学 日吉キャンパス 以経会館 シンポジウムスペース
 入場無料・予約不要・研究員対象

10:00-10:15 開会挨拶
 10:15-11:30 講演1 (慶応義塾大学 廣川和花先生)
 ● 認知症の患者と「ユートピア」—「理知」と「病」— (100分)
 11:45-12:00 午後の茶会 (慶応義塾大学 総合文化研究センター 301号室)
 ● 懇話会—13:00-14:00 (100分)
 13:00-14:15 講演2 (慶応義塾大学 総合文化研究センター 中村哲子先生)
 ● 認知症と「理知」の崩壊—その心身応答— (100分)
 14:30-15:00 休憩 (慶応義塾大学 総合文化研究センター 301号室)
 15:45-17:00 講演3 (慶応義塾大学 文彦先生)
 ● 病とユートピア—認知症の患者とケア— (100分)
 17:00-17:30 閉会挨拶

主催: 研究会 (慶応義塾大学教養研究センター、総合文化研究センター) | TEL: 045-558-3111



第1回(10月6日)会場の様子

情報の教養学

情報と社会

2015年度の「情報の教養学」では、「情報と社会」というテーマで合計6回の講演を開催しました。春学期に開催した3回の講演はニューズレター第27号で報告した通りです。秋学期では、まず黒沢文貴氏(東京女子大学)が、戦後日本における歴史に対する認識について解説しました。特に政治など様々な影響を受けていることにより、歴史認識が多様化していることを述べました。次に、岸博幸氏(メディアデザイン研究科)は、まず日本経済の現状と将来における様々な問題を解説しました。そのあと、インターネット依存による弊害について述べました。最後に、福井健策氏(弁護士)が、コンテンツと著作権について解説しました。従来有料だったコンテンツの無料化、人間ではなく機械による創作物など様々な事例を交えながら、著作権に関わる現状と課題について解説しました。いずれの講演も、内容もさることながら、各講演者の話術に聴衆が引き込まれ、大盛況でした。なお、2016年度の春学期は、「情報のリスク」というテーマで、講演を3回予定しています。(高田真吾)

情報と社会
 10-23
 黒沢文貴
 昭和の歴史と戦争を考える

2015年度 秋学期ポスター

次世代著作権
 激増するコンテンツを握るのは誰か
 1206
 福井健策

日本経済は再生するか
 構造変化の現実を理解しよう
 11・4
 岸博幸
 日本経済の再生は可能か? 構造変化の現実を理解しよう

【情報の教養学】 2016年度春学期スケジュール

- 第1回
 「メディアは世界をどう変えてきたか」 講師: 池上彰
 4月19日(火) 16:30~18:00
 第6校舎 623 番教室
- 第2回
 「『バクリ炎上』とウェブ世論」 講師: 福井健策
 5月11日(水) 16:30~18:00
 来往舎シンポジウムスペース
- 第3回
 「グーグルと国家: デジタル時代の記憶と忘却」 講師: 生員直人
 6月29日(水) 16:30~18:00
 来往舎シンポジウムスペース

2015年度の「生命の教養学」を終えて

2015年度は「食べる」をテーマとして、90余名の受講者が本学内外からお招きした講師の講義に臨みました。講師のお名前（敬称略）と講義題目を記します（講義録の公刊をお楽しみに）：山下範久「ワインにみるグローバルゼーション」、島村菜津「スローフード運動」、小泉武夫「発酵食品の神秘」、野口和行「『食べる』を『体験する』」、池上俊一「食から見るイタリア史」、山本道子「日本人の食べ方・味わい方から見る日本の文化」、生源寺眞一「日本の食料と農業」、勝川俊雄「魚はいつまで食べられる?」、勝川史憲「生体のエネルギー出納バランスと体重コントロール」、大道寺慶子「東アジアの食餌—消化と健康」、比嘉理麻「食べられるブタ、嫌われるブタ、愛でられるブタ—沖縄のブタ食文化」。各講義に啓発されつつ別々のトピックを扱った複数の講義が網の目状に接続し「教養」が形成されていく知的刺激を経験する機会となったと思います。（赤江雄一）

2015年度「身体知・映像」後期 —現実と夢をめぐる冒険

「身体知・映像」の授業では、毎年、後期は文学作品の映像化に取り組みますが、2015年度は、やや異色の原作選びになっています。この秋学期は、臨床神経心理学者ポール・ブロッソスの『脳の彼方へ—神経心理学の旅』のなかから、「A-Z」、「鏡」といった二つのフィクションを選び、そのテーマを生かした自由度の高い映像制作を実践しています。ブロッソスの作品は、現実と夢、あるいは現実認識と事実、どこでどのようにすれ違ふのか、というテーマを主題にしています。2015年度は、二つのグループに分かれて、この現実と夢のすれ違いをめぐる二つの映像作品を制作し、2月5日のアカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションにて、初上映しました。またさらに完成度を高めたヴァージョンを4月6日の特別上映会にて上映しました。

（佐藤元状）

「身体知・音楽」授業を終えて

「身体知・音楽ⅠⅡ」は、音楽を通じて築き上げてきている歴史および文化を、実践を通じて学ぶことを目的としています。成果発表は、主に公開演奏会という形で行ってきています。そこには、社会還元の意味合いをも持たせてあります。2015年度は、器楽クラス、声楽クラスの成果発表として計3公演を日吉で催しました。また、声楽アンサンブルは、2月の初めに東北で演奏会を開きました。日吉での公開演奏会は、①2015年7月5日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー演奏会「ヴェネチアからの発信～古楽器で奏でる17世紀のイタリア器楽～」②2015年10月24日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム声楽アンサンブル×アンサンブル・ミリムによるコラボ演奏会「バッハ・モテット×シュツツの複合唱」③2016年1月10日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミーオーケストラ演奏会「ドイツ管弦楽組曲の響き」でした。（石井明）

2015年度身体知講義「声と記憶」

「声」と「記憶」に着目して、文学作品と他者とのコミュニケーションから得た着想を、自らの創作につなげ、朗読会（成果発表会）を行うことを目標としました。取り扱ったのはすべて「記憶」に関する物語。ジェイムズ・ジョイスの「ダブリナーズ」の最後の箇所、ジュニー・ホロウエルショートショート、「あなたを含めて何もかも歴史」、そしてステイヴン・ミルハウザーの「だんだん近づいていく」の3篇です。授業ではそれぞれの作品を朗読しながら、他者の声、自分の声に耳を傾け、声を通すことでいかに文字で書かれたものの解釈が変わってくるのかを体感しました。続いて語ることと聴くことを通して他者の記憶に耳を傾け、そこから新たな創作につなげます。年齢や性別の異なる他者を受け入れ、創作を通して自己化する体験は、解釈することのもうひとつのあり方を提示します。創作したものに関しては最終日に公開発表会を行い、聴衆とシェアしました。授業に関しては毎回振り返りシートを提出していただきましたが、振り返りそのものがひとつの作品でもありました。通信教育部の学生と通学生が一堂に会するからこそ可能となる、このような貴重な授業がこれからも増設されることを願っています。

（横山千晶）

教

「教養」という言葉の
ートを取れば分かったこ
際にやってこそ身につく
目は「教」もちろんで

2015年度の「アカデ

論文の書き方、資料検索
大学での勉強方法、あるい
す。2015年度も多くの先生
通年で開講しました。その成
催されたのは2月5日。各々
体知・映像」クラスの作品
の表彰も行われました。参加
学や歴史の研究から、社会
に幅広。プレゼンテーション
ました。中でも特筆すべきは
でも、水際だっていました。
する。グローバル化の叫ばれ
くんでいたのです。これから

英語論文を書く難しさ

私は塩分摂取制限に
した。最初は調べても、
当たらず、文献探しと主
行き詰まりました。主張が
式な英語論文の形で表現
ったです。200words書
ラグラフもありました。問
示して検証し、それを正
を実感しました。しかし論
自分の思考や努力がしっ
して喜びが込み上げてき
学習」にも役立つ、いい
論文部門金賞を受賞でき

養研究センター設置科目



定義は難しいですが、たとえば中国の儒学だとそれを「教」と「養」に分けて考えるようです。「教」の方は乱暴に言うと講義で済むもの。ノ
とになるもの。対して「養」は実践を伴わないと分からないもの。畑作とか魚取りとか建築とか儀式の仕方とか。自分でからだを動かして、実
の。身を養うには食べたり飲んだり動いたりせねばなりません。黙って座って聴いているだけでは生きていけません。教養研究センターの設置科
ですが、プレゼンテーションしたり、演じたり、撮影したり、演奏したり……。2015年度も「養」の教育をよく実践できたと思います。（片山杜秀）

「アカデミック・スキルズ」 — 英語クラスに大きな成果

の仕方、プレゼンテーションのやり方。アカデミック・スキルズは
は大学生に相応しい思考様式を、実践的に身に付ける授業で
方の協力を得て、日本語3クラス、英語1クラスの計4クラスを
成果の発表の場としてのプレゼンテーション・コンペティションが開
クラス2名ずつ、計8名の発表者が競いました。合わせて「身
発表、教員による非公開の審査で行われた論文コンペティション
論文はやはり各クラス2本ずつ。プレゼンテーションも論文も、文
調査を伴うもの、理科系の最新の知見を駆使するものまで、実
のスキルは概ね洗練され、論文執筆のスキルも高水準に達してい
、やはり英語クラスの見事さでしょう。プレゼンテーションでも論文
日本語に優るとも劣らない水準で、英語でも書き、英語でも発表
れる時代に求められる、そういう学生を、英語クラスは上手にはぐ
の大学教育を考えるための模範的成果と思います。（片山杜秀）

コンペティション入賞者一覧

■論文部門

| 賞 | クラス | 学部・学年 | 氏名 | 演題 |
|------------------|------------|-------|-------|--|
| 金 | 火曜 (英語) | 医・1 | 鈴木亮介 | Does Salt Damage Human Health? A Reflection on Salt Intake Restriction Policy in Japan |
| 銀 | 火曜 | 商・1 | 吉田大喜 | 車種別自転車取締法 |
| 銀 | 木曜 | 商・2 | 松本光司 | 『ヘア・リボンの少女』はよい買い物だったのか? —東京都現代美術館の展覧会運営方針からの 考察— |
| 審査員 特別 奨励賞 | 水曜 | 法・2 | 花里百合子 | 唐織からみた能の変遷 |

■プレゼンテーション部門

| 賞 | クラス | 学部・学年 | 氏名 | 演題 |
|---|-----|-------|------|--|
| 金 | 火曜 | 理・2 | 土谷滯 | 自分の声を利用した重度障害者用意思伝達装置 の有効性と普及状態 —マイボイスとその利用者を例に— |
| 銀 | 火曜 | 法・1 | 保泉空 | 日本人の宗教に対する理解を目指して —VTSを応用した仏像鑑賞教育の有効性— |
| 銅 | 水曜 | 法・2 | 石川萌子 | 演劇改良と女形 —なぜ女形は女優でないのか |
| 銅 | 木曜 | 経・2 | 河田航佑 | 無人タクシーの普及に向けての現状と課題 |

日吉で一番アツイ授業

この度は身に余る賞をいただき、大変嬉しく思
ております。「日吉で一番キツイ、でも、一番アツイ
授業」、これがアカデミック・スキルズを終えた後の
私の実感です。先生方は皆とても熱心で、授業で
のご指導はもちろんのこと、提出した論文をその日の
うちに真っ赤に添削していただいたり、コンペティシ
ョンの練習でも多くのご指摘を受けたりしました。特に、
論文にはオリジナリティのあるデータとそれに基づく主
張が重要だとアドバイスを、翻ってみると、とても
有益なものであったと思います。また学部を超えたク
ラスメイトもアツイ人ばかりで、彼らから多くの刺激を
受けました。アカデミック・スキルズで学んだことを活
かして、これからも精進していきたいと思います。

（理工学部2年 土谷滯）

真摯に学問と向き合うこと

この度は銀賞を受賞させていただき、誠にあり
がとうございました。私にとってこの大会に出場し、
入賞することは4月からの目標であり、その念願を叶
えられた事を大変嬉しく思います。コンペティシ
ョンを終えてみて、私の研究にはまだまだ未熟な点
が多くあることを痛感しました。しかし、全体を通した
講評の中で「全ての発表には自分の主張と真摯に
向き合い、他者へ伝えようとする姿勢があった」と
いう言葉をいただき、一年間自分が学問に必死に
取り組もうとした態度そのものが評価され、素直に
嬉しく感じました。いつか自分の研究が、大きな成
果として実を結び、社会へ貢献したい。そのため
に一番重要なことを今回の経験を通して学べたよ
うに思います。

（法学部1年 保泉空）

に対する批判をテーマにし
主張を裏付ける文献は見
張の構築との間で何度も
まよってきても、それを正
見していくのはさらに難し
く、4時間かかったパ
イプを立てて、十分な根拠を
正確に表現することの難しさ
が論文が出来上がったときは、
ほっとしたような気が
しました。4年次の「自主
研究になりました。今回は
初めて、大変光栄です。
（医学部1年 鈴木亮介）

日吉学

実験授業「日吉学」は、普通部生から大学院生まで、日吉の地に学ぶ学生・生徒がそろって参加しています。3年目となる2015年度は、春学期3回、秋学期4回の通年開催でしたが、3人の大学生（うち1名は通信教育課程）が全回休まず出席し、「日吉学修了証」を授与されました。2016年度は秋学期の開催を予定しております。（有川智己）

楽しい考古学—日吉の遺跡と遺物の楽しみ方を考える

日吉一帯は、縄文時代の貝塚や弥生時代の巨大集落、古墳時代の大型前方後円墳などからなる遺跡の密集地で、義塾にはそれらの遺跡の出土遺物が多数保管されています。今回は、そうした遺跡と遺物に触れながら考古学を楽しむ方法を考えることにしました。

まず全員で、保存された弥生時代住居址を見学してから会場の西別館に移動。そこで縄文土器や弥生土器を手にとって観察し、それぞれの文様をオープン粘土の上に再現しました。続いて、考古学の研究成果を面白おかしく紹介する活動をされている、下島綾美先生（展示プランナー・お菓子作り考古学者）と白鳥兄弟先生（Y市博物館学芸員・大道芸人考古学者）に、それぞれの活動（土器片クッキー、土偶マ임）を披露してもらい、最後に受講者全員で、楽しみながら考古学を学ぶアイデアを出し合いました。（安藤広道）

めざせ縄文人—日吉の森で食べられる実を探そう

日吉記念館の向こう側には、日吉の森と呼ばれる大きな森が広がっています。日吉の森では、秋になると様々な木の実や草の実がなります。日吉キャンパスには縄文時代から人が住んでいたと言われていいますから、縄文の人たちも日吉の森で食べられる木の実を探していたでしょう。このプログラムでは、日吉の森に出かけ、縄文人が食べていたと思われる木の実を採集して教室に持ち帰り、調理して食べてみました。どの実も焼いただけで食べられるのですが、今回は、縄文人が作ったと言われる縄文クッキーを再現することにしました。最後に全員で試食しましたが、十分に美味しいクッキーでした。今回のプログラムを通して、日吉の森の過去やそこに暮らしていた縄文人の生活の一端を想像できたのではないかと思います。（福山欣司）

日吉のアーカイブマップを作ろう！

今回は日吉の商店街の地図化を目指しました。街の地図といえば住宅地図のトップ企業であるゼンリン。講義前半はそのゼンリン調査部の佐藤さんから街の調査のノウハウの基本を学びました。講義後半は、「地図のウィキペディア」として近年有名になったOSM（オープンストリートマップ）の入力方法を、OSM事務局の田村さんから手ほどきを受けました。現地調査では班に分かれ、1/2,500縮尺の住宅白地図を持って「ヒョウラ」の店舗を調査しました。参加者はみな、日吉の街の飲食店の多さに驚き、教員の間では、30年以上も続く店舗や最近閉店したレストランなどが話題になりました。学生の街と知られている日吉は、東京のベッドタウンとしての別の顔を持ちます。今後も現状の日吉の街の調査を続けつつ、今回、ゼンリンから提供していただいた昭和30年代～50年代の日吉の地図を使って、当時の街並みをアーカイブマップ上で再現してみたい。それぞれの時代、日吉で過ごした塾生の青春を思い出すのに役立つアーカイブマップを作るのが究極の夢です。（太田弘）

個人のアイデアを融合して革新的なアイデアを生み出すには？

2015年度の日吉学では、6回に渡って参加者がグループに分かれ、フィールドワークやワークショップを行ってきましたが、同じものを見たり、聞いたり、触ったりしたとしても、得られる気づきは様々です。第7回目は、参加者が2つのグループに分かれ、それまでの日吉学で得た気づきをもとに日吉の魅力や課題に関するブレインストーミングを行い、その後、日吉の街でカメラやメモ帳を持って改めてフィールドワークを行いました。その上で、「日吉を面白い街にする」ためのアイデア創出や、そのアイデアを磨き、集合知にするためのプロセスを経て、最終的にはアイデアが実現した場合の日吉でのストーリーをニュース記事にするという取り組みを行いました。世代や興味、専門が異なる参加者がワークショップを行うことで、多様なアイデアが創出されることを体感しました。（神武直彦）

学習相談：「学び場」づくりの新局面

本稿を執筆している12月現在、学習相談のレポートやプレゼンに関わる本格的な相談件数は例年に比べて少ない状況です。これを広報不足や利用者の不評のせいと捉えるのか、教員・塾生間のコミュニケーションが円滑化した結果と捉えるのか、判断は難しいと思います。

学習相談で行っているピア・メンタリングは、「学び場」を形成できない学生へのセーフティー・ネットとして大学教育において浸透してきました。しかし少人数の授業やグループ・ワークを採用した授業が増える中、この役割は徐々に縮小していきます。この7年間、大学の教育の在り方は大きく転換してきました。「学び場」プロジェクトと学習相談も、新たな展開を考える時が来たのではないのでしょうか。

（社会学研究科後期博士課程3年 原圭寛）



研究サポート「研究の現場から」

〈第15回「研究の現場から」〉

柳桜亭江戸廻花也——長州藩主毛利斉元の狂歌遊び

多くが海外に流出して、日本より海外での研究が盛んな狂歌摺物（狂歌が入った私家版の美しい浮世絵）は、留学中に欧米で追いかけていたトピックの一つです。

研究対象の江戸廻花也は、江戸後期の1820～30年代に、役者と芸者をモチーフとした摺物を人気絵師に描かせ、大量に制作した人物。狂歌のみならず、自作の俗謡も掲出しています。2008年にスイスでの摺物展の図録に、花也の正体が長州藩主であることを発表し、多くの人の協力で全容を解明するリストを作りましたが、やはり現地調査をすると新出資料が出てきました。殿様の遊びは、身分を越えた江戸時代の文化交流の一側面をみせてくれ、江戸文化を考える鍵になりそうです。（津田真弓）

【予告】

第16回「研究の現場から」——研究と人の交差点——

2015年度は春学期に2回、秋学期に1回、全3回の「研究の現場から」を開催しました。いずれの会も盛況で、非常に活発な議論が飛び交いました。この研究会が日吉キャンパスのイベントとしてすっかり定着したようで嬉しく思います。2016年度も、研究交流がさらに活発になるように、引き続き「研究の現場から」を開催していきます。まずは6月に実施する第16回のご案内です。新任の方も、そうでない方も、どうぞ気軽にお立ち寄りください。（工藤多香子）

2016年6月1日（水）18:15～ 来往舎101にて

・荒木文果（理工学部）

「15世紀ローマにおける聖人称揚と美術——フランチェスコ会の活動を中心に」

・大野真澄（法学部）

「アカデミック・ライティング研究と指導——『ジャンル』によるアプローチ」

教養研究センター選書15 ダンテ『神曲』における数的構成

ダンテ（1265-1321）の『神曲』は、誰もが知る中世文学の金字塔ですが、世界の文学の中でも例を見ない唯一無二の緻密な数的構成によって創られています。これまで日本でこうした視点から解説された書籍は未だ出版されたことがありません。手前みそですが、本邦初の『神曲』の研究書です。選書というスタイルのため、小冊子ではありますが、ダンテの数的構成の中から最も興味深い事例を精選して、紹介しています。数的象徴を用いて、ダンテがどのように14233行にも及ぶ『神曲』という大伽藍を建造したかを知れば、日本文学とはまったく異質な西洋世界の発見に繋がると同時に、『神曲』が単なる文学作品という範疇を越えた総合的な知の集大成であることも垣間見えてくることと思います。ダンテの複雑で有機的な驚くべき世界を堪能して頂ければ、幸いです。（藤谷道夫）

教養研究センター選書

当センター所員が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投げ、研究・教育相互の活性化を目指そうとするものです。これまで15冊刊行されています。奮ってご応募ください。事前申込み締切：7月29日 原稿提出締切：9月30日

〈第15回「研究の現場から」〉

オペラ／音楽劇における沈黙の諸相

ワーグナーの舞台作品では、沈黙はドラマツルギー上重要な役割を担っています。その現れ方は、①言葉の不在（登場人物が歌わない）、②言葉と音楽の不在（ゲネラルパウゼ）、③音響化された沈黙に大別でき、本発表では特に③に着目しました。これは特殊な音響構造によって、受容者の聴覚的知覚を通して沈黙を喚起させる、つまり逆説的に沈黙や静寂を生み出すという手法です。具体的には、弱音のソロ・ティンパニの使用や、音の反復や微細な動きによって停滞する音響、ワーグナーの表現を借りるなら「時間（つまり時間芸術である音楽）の空間化」によって、沈黙や静寂を想起させる方法が用いられています。ここに20世紀の音楽につながる現代性があることを指摘しました。質疑応答の際には多くのご質問や貴重なご指摘をいただき、大変有意義でした。このような機会をいただき、心より感謝申し上げます。（北川千香子）

学会・ワークショップ開催支援

当センター所員が企画する研究会やワークショップ等を応援し、広く所員の方々が参加できるような研究・交流の場を広げたいという趣旨で、開催に伴う経費の助成や日吉キャンパス内等の広報の支援いたします。毎年2回の募集期間を設けて募集しています。

受付期間は、春学期開催分は1月末日まで、秋学期開催分は7月末日までとなっており、次回の締切は7月29日。また経費を必要としない「後援・共催」については随時受け付けています。

実験授業の支援

本事業は「学生が自ら問題を発見し解決する」という教養研究センターの教育目標に沿った既存の枠組みにとらわれない、創造的発想・論理的思考・総合的な言語力の涵養を図る実験授業を一般公開して、メソッド開発を試みる所員を支援・奨励する制度です。受付は、10月31日までとなっております。奮ってご応募ください。



読書会推進企画「晴読雨読」

今年度から読書会推進企画「晴読雨読」が始動しました。センター企画で定期的に読書会を開催します。開催予定は随時所員にお知らせします。どなたでも自由に参加できますので、どうぞお立ち寄りください。学生も大歓迎です。読書会に関心のありそうな学生にぜひ積極的に声をかけてください。同時に、所員が自主的に開催する読書会を応援します。場所の確保、広報の面でお手伝いしますので、読書会を企画していらっしゃる方は当センターまでご連絡ください。

【情報の教養学】第2回：福井健策 →特集II

5月11日(水) 16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】 →特集I

「新入生歓迎行事：大学体育施設紹介と体力および体組成測定」

5月12日(木)、19日(木)、26日(木)、6月9日(木)
16:30～18:00 協生館トレーニングルーム

【HAPP】「塾長と日吉の森を歩こう」 →特集I

5月21日(土) 14:30～ まむし谷(散策)

第16回【研究の現場から】 →特集V

6月1日(水) 18:15～ 来往舎101

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
「アメリカ研究ワークショップ」**

6月16日(木) 時間/会場 未定

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
「日本エミリオ・ディキンソン学会第31回大会」**

7月9日(土) 13:00～17:30 来往舎シンポジウムスペース

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
「Morphology and Lexicon Forum 2016」**

9月10日(土) 13:00～19:30、9月11日(日) 10:00～16:00
来往舎大会議室

【教養研究センター選書原稿募集】

事前申込み締切：7月29日(金) 原稿提出締切：9月30日(金)

4月

【情報の教養学】第1回：池上彰 →特集II

4月19日(火) 16:30～18:00 第6校舎623番教室

【HAPP】 →特集I

「新入生歓迎行事：大野慶人舞踏公演—土方巽舞踏大解剖」

4月22日(金) 18:15～20:00 来往舎イベントテラス

【読書会推進企画「晴読雨読」】第1弾

エマニュエル・レヴィナス『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』を読む

4月27日(水) 18:30～ 来往舎209

【HAPP】「新入生歓迎講演会：物語の世界IV」 →特集I

5月12日(木) 18:15～20:00 来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】 →特集I

「新入生歓迎行事：ライブラリーコンサート in 日吉—図書館がコンサートホールになる3日間—」

5月20日(金)、23日(月)、24日(火) 午後
日吉メディアセンター1階ラウンジ、地下1階AVホール

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
「Prof. D. A. Miller 招待講演会」**

5月21日(土) 時間未定 来往舎シンポジウムスペース

【情報の教養学】第3回：生貝直人 →特集II

6月29日(水) 16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】「新入生歓迎行事：日吉音楽祭2016」 →特集I

7月3日(日) および9月24日(土) 協生館 藤原洋記念ホール

【2016年度「庄内セミナー」】

8月29日(月)～9月1日(木)
山形県鶴岡市(鶴岡タウンキャンパス他)

5月

6月

7月

8月

9月

求ム・来往最前線情報!

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ(日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先)、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。教養研究センターへ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp (各イベントのお問い合わせもこちらへ)

私の^{マルマル}お宝自慢

蝶は、物心ついた頃から私にとって身近な存在でした。客間には、昆虫少年だった父が採集したオオムラサキやコムラサキ、海外の友人と交換したモルフォなどが整然と並べられた標本箱が、何箱も飾られていました。また、庭先でアゲハの幼虫が見つければ、食草であるミカンの葉ごと室内に持ち込まれ、羽化して放たれるまで飼育されるような環境でした。

父の教育の甲斐なく、子供の頃の私は、家の中で知らぬ間に蛹から羽化したクロアゲハが斜め後方より私のほうに突進してきた時は、喜びよりは恐怖心のほうが強い状況でした。それでも、長い年月をかけて慣らされた結果、今では父から譲り受けた標本箱が、見ている見飽きないほどになり、私の宝物の一つになりました。

2年前の晩夏、私は庭先に飛来したツマグロヒョウモンを昆虫網を使って採集し、父に展翅してもらいました。これが父の最後の展翅となりました。この一匹を見る時、父とのその折の思い出が鮮やかに蘇ってきます。父が集めた虫たちにも、その時々思い出がたくさんつまっていたことでしょう。中には1943年に採集されたものもあり、保存の必要性を強く感じました。「標本ハ虫害及ビ黴ヲ防禦スレバ永久ニ保存ガデキル」そうです(平山修次郎『原色千種昆蟲圖譜』)。オリジナルを大切に保存しつつ、一方で私は一匹ずつ、デジタル画像によるデータベース化も開始しました。父の教育は見事に成功した……のかもしれませんが。(鈴木都美子) (Photo ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius* 24-9-2014 ♀ Tokyo Nerima)

